

第1回 実践検討会

令和4年9月9日

○実施園 公私連携幼保連携型認定こども園 5歳児

○指導助言 養成大学スーパーバイザー



カンファレンスを進行した幼児教育アドバイザーの自己分析

【研究主題】 「一人一人が輝き夢中になって遊ぶ子をめざして」
～「何かな」「やってみたいな」興味をもつ環境を探る～

【5歳児ほし組 活動のねらい】

- ・友達と一緒に体を動かし、いろいろな動きを試したり繰り返し挑戦する楽しさを味わう。
- ・身近な自然物に興味をもって関わり、見たり考えたりしながら遊びに取り入れることを楽しむ。

【見てもらいたい視点】

- ・当日のねらいと環境があっているか。
- ・遊びに向かう子ども達の興味関心のきっかけはどこにあるのか。
- ・子ども達の夢中になるタイミングはどこか。
- ・遊びの中での遊びの芽がどこにあるかを探る。

【カンファレンスをするにあたって事前準備・意識したこと】

- ・昨年度の実践検討会では、付箋を使ってのカンファレンスを行う回もあったが、付箋を書く時間を有効的にするために、口頭での意見交流をする回もあった。
→今回のカンファレンスにおいても、保育見学の後、すぐにカンファレンスが始められるようにするため、付箋は使わないことにする。
- ・記録用紙の作成…研究主題、見てもらいたい視点（上記）、カンファレンスの進

め方（明日につながるヒントにも繋げること）を記入しておく。

- ・記録用の模造紙…机を囲んで話し合いを行うため、ホワイトボードを使わず、模造紙に記入をしていく。
- ・カンファレンスは、広く浅い話にならないようにするため「見てもらいたい視点」をもとに、当日繰り広げられる遊びに照らし合わせて進めていく。（遊びの数が多いう場合は、展開されていた遊びを選ぶことにする）
- ・明日につながるヒントに繋げることで、公開保育をしていただく園へのおみやげになるようにする。
- ・司会者と記録者を分ける。

【カンファレンス】（視点をもとに子どもの姿を出し合う）

- ・当日は天候不順の為、雨天の日案で保育。保育室とテラスを活用しながら、①フープ遊び②泡でクリーム作り③宇宙人のお家ごっこ④ビー玉転がし遊びの4つの遊びが展開された。
- ・保育見学の中で、特に遊びの展開があった①フープを遊び②泡でクリーム作り④ビー玉転がし遊びを中心にそれぞれの遊びの視点についてカンファレンスする。

【カンファレンスを振り返って】

- ・限られた時間の中で、一つ一つの視点についての時間配分が気になり、どこまで深い語り合いをすればよいのか迷った。しかし、視点を決めておくことで、論点がずれにくく、明日につながるヒントについてまで話ができたことは良かった。
- ・今回の話し合いでは活発に意見が出ていたが、園内で行う場合、参加者一人一人が意見を出し合えたかを確認しながら進めていく事は難しいと感じた。
- ・ポストイットを使わず口頭での意見交換は、やはり時間を有効に使うことができると感じた。しかし、参加者の経験年数等に応じてポストイットを使用した方が語りやすい、保育見学のみの場合意見を参加者に委ねることができる等、それぞれのメリットデメリットを考えるきっかけとなった。
- ・司会と記録を分けたことで、発言者の話をじっくりと聞いたり頷いたりすることに専念できた。
- ・今回の記録は、ホワイトボードを使用せず模造紙を囲んで話し合いをしたのに、目を向けながら話を進められれば良かった。自分自身が進めることに必死になり、様々なところに視線を向ける余裕がなかった。

【講評より学んだこと】

- ・遊びを選んで話し合うことは焦点を絞ることができるが、様々な遊びの中で参加者の見る視点や時間帯も違って来る。選んだ遊び以外のことも、少し振り返る時間を取ることで、参加者のみんなの満足感になる。

- ・ホワイトボードでの記録の場合、みんなで見られる利点がある。模造紙などに記入する時は、机の上にペン等様々な物があると、注目が反れてしまうこともある。また、途中で模造紙を壁に貼って振り返りながら進めるのも良い。
- ・副園長として普段の保育等から「〇〇なってほしい」という思いがあると思う。

{ いつも頑張っていること（手ごたえを感じられること）
 「〇〇な所はどう？」（背伸びをして頑張れるポイント）
 最後は、良かった所で締める
 }

一人一人の職員との関係性に合わせて、言葉のサンドウィッチが大切である。

- ・カンファレンスの良さは、様々な考え方を知り気付きが多くある。まとめることよりも、「問い」を大切にし、その場で答えが出なくても、多面的な考えを引き出す場でありたい。自分の保育を振り返ることができるように終わり、次に繋がるカンファレンスでありたいと思った。

カンファレンスを通しての学び、気づき（こどもの姿の捉え方、協議内容について）

- ・遊びが動き、展開できたことをうまくピックアップして話を進めていて、分かりやすかった。話しやすい雰囲気もあり、子どもの生き生きと遊ぶ姿をそれぞれが捉え、活発な発言が出来ていた。司会の先生も時間配分を考え、次の課題にうつったり、みんなの意見をまとめたりしていた。短い時間の中でも、子どもの気づきや発見に、私たちもドキドキワクワクできた。そんな生き生きと主体的に遊ぶ子ども達の環境や保育者のさりげない言葉掛けなど、学ぶことが多かった。

- ・研究主題をもとに視点をしぼって、子どもの捉えを出し合ったので、話したい視点が大事にできた。視点を明確にすることで活発に話はずむと感じた。
- ・司会の先生が参加者の意見を受け止め共感し、次へと繋ぐ言葉で進めてくださり、意見交換が活発にできたと感じた。

- ・事前に担任より見て欲しい視点を聞いておき、事前にアドバイザーの先生方に伝えたことで、深く話し合うことができた。視点をしぼることで、話がブレずに深められたことは、協議内容としては良かったと感じる。

- ・自分が見ることができなかった場面の子どもの姿について、他の先生が話されるのを聞くだけで、その遊びの面白さ、子どもの様子が見えてきて保育の楽しさが伝わってきた。多面的にいろいろな人に見てもらうことで、子どもの捉え方が人によって違うこともあるので、それがまた保育者の気づきとなっていくであろうと思えたカンファレンスだった。

- ・遊びを3つに絞ることで、話があちこちに飛ぶことなく、子どもの姿、環境はどうだったか、保育者の援助に添って話ができ、意見が出しやすく、活発な場になった。

- ・先生のプラスの声掛けと共感の姿勢、昨日との違い、これからどうして行きたいという明日への期待でワクワクする子どもの姿があり、改めて保育者の援助の大切さを

実感した。

今後現場でどのように活かしていくか

- ・園内公開保育をきっかけに、各クラスの子どもの様子や保育者の関わり、環境について意見を出し合うことで新たな発見をしたり、確認をしたりしながら、クラス担任が意欲的に保育教育できるようにサポートしていきたい。
- ・うまくまとめようとするのではなく、話しやすい雰囲気をつくり、一人一人の意見や捉え方に寄り添い、受けとめていく。また、子どもの姿をたくさん話ができるように、保育の様々な場면을把握しておきたい。
- ・カンファレンスを進める時には、話しやすい雰囲気づくり、それぞれの意見を受け止め共感する姿勢、次に繋がっていく言葉、笑顔などを心がけ意識をもっていきたい。
- ・参加者の中での記録の活用の仕方を考えていく。みんなで共有する時間を持ったり、見える化したりしていく。
- ・園内研修でカンファレンスの機会をつくること。その中で、先生方が保育内容について語り合い、自分の思いだけでなく、他の職員の話聞いて、子どものことを深く見取り、その姿から学びを共有できるようにしたい。
- ・今回の司会、記録共に、両先生方がとても場に慣れておられて、役割をきちんと果たされていたので、自身も園内で実績を積み、アドバイザー研修でも実績を積んでカンファレンスの進行をスムーズに行えるようになっていきたい。
- ・園内カンファレンスを行う際にポストイットを使い、子どもの姿を出し合う形式であるが、事前に見る視点を伝え、職員が発言しやすい事前準備をしっかり行っていく。
- ・司会をするときは、相槌を打つ等、肯定的に聞く姿勢を大事にし、話しやすい雰囲気をつくる。
- ・カンファレンス内容を今回のように3つの場面にしぼる等し、時間内で深みのある話し合いができるようにする。

講評より学んだこと

- ・園の研究主題を中心にカンファレンスを行うこと。子どもの姿を中心に語ること。時間配分を考えて進めていくこと。記録をもっと生かせるように書くだけでなく、途中で掲示して見たり、ホワイトボードを使用したりしてもよい。カンファレンスで取り上げる遊びを絞ったが、そのことによって遊びのつながりがあったことについて意見交換ができなかったのが、遊びを絞ることも手段ではあるが、場面として取り上げても良かった。司会がみんなに対して問いを出しても良い。
- ・必ずまとめなくても、答えが出なくても良いという言葉に少し肩の力を抜くことが出来た。必ずしも「こうでなければならない」というのではなく、たくさんの子どもの姿を出していけるように進めていきたいと思った。
- ・遊びが複数あった為、カンファレンスの際に3つに絞ったが、遊びと遊びがつなが

り、拠点があって友達同士がつながる場面があったことを教えていただいた。その姿を捉えきれずに、カンファレンスの話題に上がらなかったことは、自身が保育をしていたらきっとすぐに気づいた点だったが、自身がクラス担任から離れて2年経ち、保育を見きれていなかったことに気づき、自分自身の今後の課題であり、今回の学びでもあった。

- その日の空間の真ん中に据えた遊びは、カンファレンスで3つに絞るのであれば、入れた方がよい。隣との遊びのつながりが見え、イメージの共有の中で遊びが広がる。カンファレンスでも枠を超えた遊びの繋がりの中で、次の目当てが見えてくる。(例：2, 3人の遊び→クラス全体へと)
- ホワイトボードが無い、書きにくい等で模造紙を使用するのであれば、カンファレンスで一度は、壁に貼り、みんなで見直し再構築していくと良い。
- 保育を行った先生やクラスには、良いことは言えても、こうして欲しい等の言いにくい事は、頑張ったねと手応えを持てることを伝え、〇〇はどうなの？と問いを挟む。最後は気持ちよく終えるサンドイッチ方式で伝える。
- 協議をする遊びを3つにしぼって話したが、参加者が見ていないところもあるので、遊びの絞り方は考えるべきである。
- 1つの遊びごとに視点を通して話していくと遊びと遊びのつながりや人と人のつながりが見えなくなってしまう。今日は宇宙船ごっこが取り上げられなかったが、遊びの拠点ともなる遊びだったので、遊びの拠点やみんなが見ている遊びをカンファレンスに入れていくことも必要。
- 記録を最後まで参加者が確認することがなかったので、ホワイトボードや壁を使う、途中で確認し合うなど記録の使い方を考えていく。
- カンファレンスをまとめることよりも話をするのが大事。いろいろな選択肢があり、その場で答えがでなくても話しをし合うことに意義がある。
- 講師の先生から「問いがうまれるといい」ということを教えていただき、具体的には「片付けをどうしている？」であれば、「自分だったらこうするとか、違うところはありませんか」の問いを挟んで伝えていく。
- 子どもの姿を中心に語り始めたことがよかったという講評より、カンファレンスの意図するところを再認識できた。また、司会者と記録者が連携を図りながら進めることで、より一層話がまとまり、参加者に分かりやすく伝わることも学んだ。また、カンファレンスの参加者に、いかに課題意識を持たせながら参加できているかが大切で、そのためには、参加者に問いかけることも有効的であると知った。単に「どう思うか」と尋ねるのではなく「～について、あなたのクラスに置き換えて考えてみたらどうか」と具体的に問いかけてみることもよいというアドバイスをいただいた。

